

27:1 さて、夜が明けると、祭司長、民の長老たち全員は、イエスを死刑にするために協議した。  
27:2 それから、イエスを縛って連れ出し、総督ピラトに引き渡した。 27:3 そのとき、イエスを売ったユダは、イエスが罪に定められたのを知って後悔し、銀貨三十枚を、祭司長、長老たちに返して、 27:4 「私は罪を犯した。罪のない人の血を売ったりして」と言った。しかし、彼らは、「私たちの知ったことか。自分で始末することだ」と言った。 27:5 それで、彼は銀貨を神殿に投げ込んで立ち去った。そして、外に出て行って、首をつった。 27:6 祭司長たちは銀貨を取って、「これを神殿の金庫に入れるのはよくない。血の代価だから」と言った。 27:7 彼らは相談して、その金で陶器師の畑を買い、旅人たちの墓地にした。 27:8 それで、その畑は、今でも血の畑と呼ばれている。 27:9 そのとき、預言者エレミヤを通して言われた事が成就した。「彼らは銀貨三十枚を取った。イスラエルの人々に値積もりされた人の値段である。 27:10 彼らは、主が私にお命じになったように、その金を払って、陶器師の畑を買った。」 27:11 さて、イエスは総督の前に立たれた。すると、総督はイエスに「あなたは、ユダヤ人の王ですか」と尋ねた。イエスは彼に「そのとおりです」と言われた。 27:12 しかし、祭司長、長老たちから訴えがなされたときは、何もお答えにならなかった。 27:13 そのとき、ピラトはイエスに言った。「あんなにいろいろとあなたに不利な証言をしているのに、聞こえないのですか。」 27:14 それでも、イエスは、どんな訴えに対しても一言もお答えにならなかった。それには総督も非常に驚いた。 27:15 ところで総督は、その祭りには、群衆のために、いつも望みの囚人をひとりだけ赦免してやっていた。 27:16 そのころ、バラバという名の知れた囚人が捕らえられていた。 27:17 それで、彼らが集まったとき、ピラトが言った。「あなたがたは、だれを釈放してほしいのか。バラバか、それともキリストと呼ばれているイエスか。」 27:18 ピラトは、彼らがねたみからイエスを引き渡したことに気づいていたのである。 27:19 また、ピラトが裁判の席に着いていたとき、彼の妻が彼のもとに人をやって言寄せた。「あの正しい人にはかかわり合わないでください。ゆうべ、私は夢で、あの人のことで苦しいめに会いましたから。」 27:20 しかし、祭司長、長老たちは、バラバのほうを願うよう、そして、イエスを死刑にするよう、群衆を説きつけた。 27:21 しかし、総督は彼らに答えて言った。「あなたがたは、ふたりのうちどちらを釈放してほしいのか。」彼らは言った。「バラバだ。」 27:22 ピラトは彼らに言った。「では、キリストと言われているイエスを私はどのようにしましょうか。」彼らはいっせいに言った。「十字架につける。」 27:23 だが、ピラトは言った。「あの人がどんな悪い事をしたというのか。」しかし、彼らはますます激しく「十字架につける」と叫び続けた。 27:24 そこでピラトは、自分では手の下しようがなく、かえって暴動になりそうなを見て、群衆の目の前で水を取り寄せ、手を洗って、言った。「この人の血について、私には責任がない。自分たちで始末するがよい。」 27:25 すると、民衆はみな答えて言った。「その人の血は、私たちや子どもたちの上にかかってもいい。」 27:26 そこで、ピラトは彼らのためにバラバを釈放し、イエスをむち打ってから、十字架につけるために引き渡した。

## 導入

今日でイースターシリーズ説教は第4回です。

第1回は、イエスの死に備えるという内容でした。

重い皮膚病患者だったシモン家で300万円相当の香油がイエスに注がれましたが、これは無駄遣いではなかったと学びました。

イエスの死の準備であり、犠牲的な奉仕の模範でもあったからです。

マリヤのこの犠牲的な行為はとても重要で、福音が告げ知らされる場所ではどこでもマリヤの記念としてこの行為も語り上げられるとイエスはおっしゃいました。

第1回のメッセージでは、イエスが弟子たちと最後に祝われた過越しは、イエスが弟子たちにとっても大切なことを教えるチャンスであったことも学びました。

イエスは弟子たちに、過越しの祝いはイエスがもうすぐ死なれることの象徴であり、関連しているとお教えになりました。

イスラエルの民は、エジプトで神の御怒りから彼らを守ったのが子羊の血だと信じていました。これと同様に、弟子たちは、神の小羊であるイエスの血が将来にわたって神の御怒りから彼らを守ってくれると信じなければなりません。

第2回のメッセージでは、イエスが完全な神であると同時に完全な人でもあることを学びました。イエスが神のみこころにおゆだねになったときに感じられた悲しみと苦しみについてお話ししました。

イエスはゲツセマネの園で、私たちが神の義を得るためにご自身が罪となられることを思い、苦悩されました。

イエスは捕えられ、弟子たちは皆イエスを見捨てました。

先週、第3回のメッセージでは、イエスに対する違法で不当な裁きについて学びました。

神を冒瀆したという罪でイエスに有罪を言い渡すために、数多くのユダヤの律法が破られたことを学びました。

偽証があり、夜中の内に裁判を不適切なかたちで進め、大祭司はイエスに有罪を言い渡しました。イエスは100%聖なるお方でしたが、これらのことが起こるままになさいました。

イエスは無罪でしたが、死ななければならなかったのです。それは、罪のある私たちが自由を得るためです。

では、イースターシリーズの第4回のメッセージに入ります。今日の聖書箇所は、マタイ 27:1-26 です。

ここでふたつ重要なことが記されています。

1. ユダの自殺 (1-10 節)
2. 義なる人が不義な人の代わりとなる。 (11-26 節)

#### 1. ユダの自殺 (1-10 節)

この箇所には、イエスが縛られてローマ帝国の総督ピラトのもとへ連行されたとあります。こうして、イエスが処刑されるのは明らかとなりました。

イエスを裏切った弟子のユダは、すべての出来事を見て、自分がイエスを裏切ったせいでこうなってしまったと気づきました。

ユダは自分の責任を認めたのです。

みことばには、ユダが後悔して銀貨 30 枚を祭司長と長老たちのところに返しに行ったとあります。

ユダは、「私は罪を犯した。罪のない人の血を売ったりして」と言いました。

祭司長と長老たちは、自分たちは関係ない、自分でどうにかしろ、と言いました。

ユダは銀貨を神殿に投げ捨てて、その場を去りました。

その後、ユダは首をつりました。無罪の人を有罪にした責任を感じながら生きることができなかったのです。

ユダはイエスと3年間ともに生きました。イエスをご自身を神だとおっしゃいましたが、そのおことばどおりであることをユダはわかっていました。

イエスの起こされた奇跡を目撃し、イエスの生きざまを見てきました。

そんなユダは誰よりも、イエスが神の御子であることを宣言できた人物です。

祭司長たちは、ユダが神殿に投げ捨てた銀貨を神殿の金庫に入れるのは律法に反すると判断しました。

祭司長と長老たちは集まって話し合い、そのお金で旅人たちの墓地にするために陶器師の畑を買うことにしました。

その場所は「血の畑」と呼ばれました。

祭司長や長老たちはそのとき気づいていませんでしたが、この出来事で旧約聖書の預言が成就しました。

(エレミヤ 32:6-9、ゼカリヤ 11:12-13)

この個所で、ふたつのことが対照的に描かれています。

まず、罪のあるユダと罪のないイエスです。  
次に、人の偽善と神の預言です。

### 1. 罪のあるユダと罪のないイエス (3-5 節)

この個所で私たちが理解しなければならないことがあります。それは、「後悔」と「悔い改め」の違いです。また、ユダの行動がイエスの無罪をさらに明らかにすることです。

この個所を読むと、ユダはイエスに起こったことを見て後悔し、お金を返しに行ったとあります。自らの罪悪感をどうかしようと思ったのでしょうか。

極悪な行為をする人でも、自らが感じる罪悪感から逃げることはできません。

みことばから、ユダはお金に執着する人で、盗人だったことがわかっています。

彼は、最後にお金を得ようとしたとき、そのあとどうなるかという影響を考えていませんでした。

彼はおそらく、罪のないイエスがどんな扱いを受けたのか見たのでしょうか。26 章 67 節には、イエスが殴られ、つばをかけられ、平手打ちをされたとあります。

ユダは、自らが多くの罪を犯してしまったという心の声を聞きました。

この罪悪感をユダは自分自身でどうすることもできませんでした。

それで、祭司長や長老たちにお金を返すことでどうかしようとしたのです。

それは感心なことですが、罪悪感を拭い去ることはできませんでした。

ユダは、「人に罪を知らせ、その結末について警告する神からのシグナル」を無視できませんでした。

私は以前、刑務所に長年収監されていた人と話したことがあります。

その人によると、日中は、極悪非道な犯罪者たちは罪悪感も後悔もないようにふるまっているそうです。

けれども、夜が来ると、さまざまな思いや悪夢に悩まされると言います。

罪悪感に苛まれ、夜も眠れないのです。

罪悪感はいちいち対処しなければならない感情です。ユダは、イエスのもとに赦しを求めに行くことができたのに、自殺の道を選んでしまいました。

罪悪感に正しく対処する唯一の方法は、イエスのもとに行き、罪を告白してイエスの赦しを求めることです。

イエスだけが、私たちの罪を赦すことができになります。それは、イエスが私たちの受けるべき罰を負って十字架上で死んでくださったからです。

アメリカの大きな精神病院の責任者だったある医師は次のように語ります。

「罪悪感を治療できたら、患者の 8 割は退院できます。」

つまり、精神を病んだ患者の 8 割は、何らかの罪悪感を持ち、それに対応できないでいる人たちだということです。

患者たちは、イエスのもとに来たことがないので、罪悪感を持ち続けているのです。

次に、「後悔」と「悔い改め」の違いを理解したいと思います。

### 2. 「後悔」と「悔い改め」の違い

マタイがここで使っている「後悔」と訳されたギリシャ語の単語は「メタメロマイ」です。

この単語は単に、後悔して悲しむことを意味します。

これと対照的に、悔い改めを指すギリシャ語の単語は「メタノエオ」です。この単語は、心を入れ替え、その結果、行いも変わることを意味します。

心から罪を悲しむ気持ちは、神が起こさせてくださいます。それは、悔い改めに導くためです。しかし、ユダの場合そうはなりません。

コリント第二 7 : 9-10

7:9 今は喜んでいますが。あなたがたが悲しんだからではなく、あなたがたが悲しんで悔い改めたからです。あなたがたは神のみこころに添って悲しんだので、私たちのために何の害も受けなかったのです。

7:10 神のみこころに添った悲しみは、悔いのない、救いに至る悔い改めを生じさせますが、世の悲しみは死をもたらします。

ユダが感じたのは、死をもたらす世の悲しみでした。

ユダはイエスを罪のない人と言ったにもかかわらず、イエスに対する考え方を変えず、自らの救いにイエスが必要であると認めて行動することもしませんでした。ユダはただ単に、自分のしたことの醜さを知り、その罪悪感から逃れることを望みました。

ある聖書注解者は語ります。

「ユダが欲したお金は、彼の手の中で燃える炭のように彼を焦がした。」

ユダを満足させるはずだった罪が、実際には悲しみと苦しみをもたらしました。

これは私たちにも言えることです。罪は決して私たちの祝福にはなりません。そして、罪を犯して感じる罪悪感を取り去れるのはイエスだけです。

錆びた鉄にきれいなペンキを塗っても、日が差せばペンキははげて、さびがさらされます。

イエスを信じて罪を赦してもらっていないならば、私たちの罪はいつの日か神によって暴かれます。

それなら、今日、罪の問題を解決してしまっただけでどうでしょう。

イエスに罪の赦しを求めるだけで良いのです。

ユダの二の舞にならないでください。ペテロを模範としましょう。

ペテロは悲しんで、悔い改めに導かれ、後に神はペテロを大いに用いてくださいました。

あなたが悲しみを神のもとに携えていくなら、神はあなたのことも用いてくださいます。

## 2. 人の偽善と神の預言 (6-10 節)

祭司長や長老たちは、銀貨 30 枚を押しつけられました。それで、その銀貨の使い道を考えなければならなくなりました。

彼らは、神殿の金庫にこのお金を入れることは律法に反するとわかっていました。

そして、このお金を「血の代価」と呼びました。

イエスを冒とく罪で有罪とするためにはいくらかでも律法を破った人たちでしたが、どういうわけか、このおきては守りたかったようです。

このお金を「血の代価」と認めたことで、彼らははからずも自らを罪ある者としていました。

「血の代価」とは、誰かを冤罪で処刑するために違法に授受された金銭のことです。

祭司長や長老たちは、ユダに払うお金を神殿の金庫から出すのはためらわなかったようですが、そのお金を神殿の金庫に戻すのには抵抗があったようです。

彼らはその後の行為によって、自らの罪と偽善を示しています。

彼らは公共慈善の名目で良心の呵責を払拭しようと、陶器師たちが粘土を採る土地を安く買うというアイデアを思いつきました。

粘土の採掘が終わった土地は安く買うことができます。

マタイは、この土地が今でも血の畑と呼ばれていると言いました。マタイがこの福音書を書いたのは、この出来事が起こって少なくとも 50 年経ってからです。

ですから、これらのことが起こって少なくとも 50 年は、イエスの潔白を宣言する証人がエルサレムにいたということです。

「血の畑」という呼び名は、イエスが無実の罪で訴えられ、冤罪のまま処刑された事実を伝えました。

この出来事で考えるべき重要な点は、これらすべてのことが起こることを神があらかじめ知っておられたということです。  
神の主権とご計画によって、良いことも悪いことも起きたわけです。  
神は、ご自身がどのように働かれるかあらかじめご存じでした。この出来事に登場する人々はただ、全能なる神の御手の中にある土くれに過ぎません。

では、次に **11-26** 節を学びましょう。

## 2. 義なる人が不義な人の代わりとなる。

当時、誰かを死刑に処すには、その地域を管轄しているローマ帝国の総督の承認が必要でした。この場合、管轄の総督はポンテオ・ピラトでした。

ピラトはまず、「あなたは、ユダヤ人の王ですか」とイエスに尋ねました。

イエスはそれに応えて、「そのとおりです」とおっしゃいました。

**12** 節には、祭司長、長老たちから訴えられてもイエスは報復なさらなかったとあります。

ピラトは、イエスが忍耐と平安をもってこれらの訴えに耐えておられることに非常に驚きました。

**15** 節には、過越しの時に総督がユダヤの民の希望を聞いて囚人をひとり釈放するのが習慣だったとあります。

当時、バラバという悪名高い犯罪者が捕えられていました。

ピラトは、イエスとバラバのどちらを釈放するかユダヤ人に選ばせれば、非道なバラバではなくイエスを選ぶに違いないと考えました。

**18** 節は、イエスが連行されたのは妬みのせいだとピラトも気づいていたと語ります。

ピラトが裁きの座についていたとき、ピラトの妻が彼に、「あの正しい人にはかかわり合わないでください。ゆうべ、私は夢で、あの人のことで苦しいめに会いましたから。」と言いました。

その間、祭司長と長老たちは、群衆をたきつけて、イエスではなくバラバの釈放を請願することを企んでいました。

誰の釈放を望むかと、ピラトが群衆に尋ねると、人々は、バラバと叫びました。

この時点でピラトは、無実のイエスのことが気になり、「イエスはどのようにしようか」と言いました。

すると群衆は、「十字架につけろ」と言いました。

ピラトはイエスの無実を確信し、「あの人がどんな悪い事をしたというのか。」と言いました。けれども、群衆はその質問には答えず、「十字架につけろ」と叫びました。

ピラトにはどうすることもできません。

ローマ帝国の総督として、自分の管轄するエルサレムで暴動が起きることだけは避けなくてはなりません。

そのような最悪の事態が起これば、すぐにクビです。

そこで、自分の思いを人々に示すことにしました。

ピラトは群衆の前で水に手を入れて洗い、「この人の血について、私には責任がない。自分たちで始末するがよい。」と言いました。

**25** 節には、「その人の血は、私たちや子どもたちの上にかかってもいい。」と群衆が言ったとあります。

バラバは釈放され、イエスはむち打たれました。

では、これらの出来事から、現在の私たちに役立つ教えは何でしょう。

### 1. **22** 節で、ピラトは「イエスを私はどのようにしようか。」と言いました。

これは、非常に重大な問いかけです。

今朝、皆さんに同じことをお尋ねします。

「あなたは、イエスをどのようにしますか。」

つまり、歴史上の人物イエスがご自身について主張された内容について、あなたはどうしますか、ということです。

イエスは、天の栄光を離れてこの世に来られました。

イエスは聖霊によって宿り、赤ちゃんになってこの世に来られ、通常の人のように成長し、**30歳から3年間、すばらしい働きをなさいました。**

病人を癒し、目の不自由な人を見えるようにし、ラザロを死からよみがえらせ、少年のお弁当で**5000人**の人に食事を与えました。嵐を静め、水の上を歩き、水をぶどう酒に変え、悪霊を追い出し、数々の奇跡を起こされました。

イエスのご自身が人のかたちをした神だとおっしゃいました。そして、罪を赦す権威があると言われました。

イエスは、「わたしは、世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです。」とおっしゃいました。（ヨハネ 8：12）

また、「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことはありません。」ともおっしゃいました。（ヨハネ 11：25-26）

イエスの主張を否定することも、イエスを信じることもあなた次第です。

けれども、どっちつかずの答えはありません。

考えます、と答えるなら、それはとりあえず否定したことになります。

皆さん、今日、生きているうちにイエスを信じましょう。

2. イエスは罪のある者のために死なれました。バラバは多くの罪を犯した犯罪者でしたが、イエスはその身代わりとなりました。イエスは十字架にかけられ、バラバは釈放されました。

自分はクリスチャンだと言うなら、イエスがあなたの身代わりとなって死なれたことを忘れてはいけません。それは、あなたが受けるべき永遠の罰から解放されるためです。

偉大なウェズレーは賛美の中で、「御神のひとり子我がため死に給う　こよなきその愛誰かは測り得ん」と歌いました。

今は桜の季節で、すばらしい景色を見ることができます。

けれども、何よりもすばらしいのは、すべての創造主が私たちのために死んでくださったことです。その目的とは、私たちが神の御怒りから赦され、死後、天国の故郷で永遠に過ごすためです。

そのとき、私たちは神が私たちのために備えてくださった罪も死も衰えもないよみがえりの新しいからだをいただきます。

イエスさま、私のために死んでくださってありがとうございます。

皆さんも、今日、イエスに感謝できるように祈ります。